

“信頼”を取り戻すために“真実”を取り締まれ

【訳者注】今、おそらくロシアを除いて、世界の主流メディアのジャーナリストの仕事ほど、良心に悖る不愉快な仕事はないであろう。ここにかなり詳しく描かれている、NYタイムズのフリードマンという大物コラムニストの、御用の実態を読んで、羨ましいと思う人いないだろう——その高給にもかかわらず。責任ある地位のジャーナリストは、このフリードマンの道を選ぶか、潔い（フランクフルター・アルゲマイネの）ウドー・ウルフコッテの道を選ぶか、どちらかであろう。<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/160205.pdf>

パリーは特に言っていないが、“フェイク・ニュース”という、こちらが使うべき言葉を向こうが奪って使って驚かせたのは、“ピザゲイト”の発覚と同時であったことを忘れてはならない。また、ピザゲイトに言及して、政府の偉い人たちのスキャンダルなどは、「たとえ事実であっても」暴くべきではない、秩序が乱れる、とフリードマンと同じ趣旨のことを言ったのは、法王フランシスであった。彼の言葉の忠実な訳をここで読んでみていただきたい。<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/170305.pdf>

Robert Parry

June 24, 2017, Consortiumnews.com

米主流メディアは、インターネットから“フェイク・ニュース”を一掃するための、“真実”アルゴリズムが欲しいのだと言っている。しかし本当に必要なのは、彼らが人々に与える情報をチェックすることによって、公衆の“信頼”を回復することではないのか。——R・パリー

このところ、独りよがりの“真実”についての沢山の議論が、特に、ニューヨーク・タイムズ、ワシントン・ポスト、その他の主流ニュース・メディアの人々から出ている。彼らがトランプ大統領の、その場その場の現実との対応を批判して、もし彼らの言う“フェイク・ニュース”をインターネットから追放するための、アルゴリズムを開発できたらどんなにいいだろう、と言うのはよくわかる。

<https://consortiumnews.com/2017/05/02/nyt-cheers-the-rise-of-censorship-algorithms/>



しかし、これら“真実を愛する”大物たち、例えばタイムズの Thomas L. Friedman (左) のような人々は、大変な悪影響を及ぼした“フェイク・ニュース”をばら撒いたことに対する、彼ら自身の責任を反省したことがないようである——イラクの大量破壊兵器についての虚偽、また何十万というイラク人や何千という米兵の死につながり、中東全域に、ヨーロッパにまで恐ろしい混乱を拡大した、数々のウソについて。

またそのイラクの経験によって、フリードマンやその仲間たちは、シリアの代理戦争やウクライナの内戦、またロシアとの新しい冷戦などについての、他の公式物語を疑ってみようとはしなかった。一方で、事実を確かめるように要求し、公式の主張には辻褄の合わないところがあると述べる我々の仲間は、決まったように（ロシアの）“弁明屋”、“手先”といった侮辱にさらされる。

公式王国の宣言から少しでも逸脱する者は、“真実”の敵にされるが、それは“真実”とは体制が決めるものだからである。もし私の言うこと信じられなかったら、フリードマンの[水曜日のコラム記事](https://www.nytimes.com/2017/06/21/opinion/where-did-we-the-people-go.html? r=0)を読まれるとよい。

<https://www.nytimes.com/2017/06/21/opinion/where-did-we-the-people-go.html? r=0>

フリードマンは冒頭に、あるモントリオールでの会議で質問者に答えた「もはや“真実”というものが終わるのではないかと思う」という自分の言葉を引用している。

しかしフリードマンは、自分が、いかにイラクの大量破壊兵器のウソを広め、不法で悲惨な戦争を何年も宣伝してきたことを告白して、自分の罪を認めたことはない。

もし彼が告白していたら、おそらく彼は続いて、なぜ自分が恥辱のうちに辞職しなかったのかを説明することができたであろう。彼は辞職して、何らかの生涯の贖罪の道を選んでもよかった。ところが彼はそうしないで、相変わらずウソやデマを吐き続け、高給のみならず高い講演料をむさぼっていた。

なぜアメリカ人が、もはや彼らの指導者を信じなくなったかに悩んだあげく、フリードマンは、もう一人の権威者であり、友人で先輩の Dov Seidman の言葉を引用している——「我々が、いま経験しつつあるのは、我々の社会と民主主義の根本である 2 本の柱、真実と信頼に対する攻撃であります…

「我々をアメリカ人にしているものは、我々が、我々より偉大な理想、また我々が自明であると合意した真理との関係に、署名したことであります。それが自明であればこそ、それはより完全な合一を目指して、その途上での食い違いに敬意を払いながら、前進することができるのです。我々はまた、政治を行う合法的な権威は、“我々人民” から来ることに合意しています。」

フリードマンはそこで、サイドマンの嘆きに同調して、「我々」がもはや基本的な真理を分け合うことがなくなれば、「その時は、我々の継続する絆のための、合法的な権威も、結合の基盤もなくなります」と言っている。

悪党ども

フリードマンは、このシナリオにおける悪党は「社会的ネットワークとサイバー・ハッキング」だとし、それは「過激主義者たちが、毒舌やフェイク・ニュースを、これまでになかったスピードと幅広さで、拡散することを容易にしている」と言っている。だからこれらの“真実” アルゴリズムがなかなか出現しない、ということであろう。

しかし、フリードマンのコラムを読み続けていると、本当の問題は、“サイバー・ハッキング” が“フェイク・ニュース” を作り出していることではなくて、むしろそれによって、アメリカ人が、彼らの指導層についてあまりにも多くの醜い真実を知ったことだと、わかってくる。それはウィキリーククスが、いかに民主党全国委員会が、バーニー・サンダース上院議員に対し倫理的に不利な印象を与えたか、いかにヒラリー・クリントンが法外な講演料を受け取って、ゴールドマンサックスに迎合したか、いかにクリントン財団が富裕な外国人と不健全な取引をしたか、を明らかにしたときに起こった。

フリードマンのコラムはこれを認め、再びサイドマンを引用している——「社会ネットワークとハッキングもまた、我々が十分現実的に、あらゆる組織の内部の働きや、それを経営する人々の姿勢を見ることを可能にした、とサイドマンは言っている。そして、それはほとんどすべての組織への信頼を腐食させ、人々は自分の見るものが嫌なので、多くの指導者は信用を失ったのだと言っている。」

言い換えると、いかに“信頼” を回復し、“真実” に敬意を払うようにするかへの答えは、無知な大衆から醜い現実を隠すことである。人々が事実から目隠しされるならば、体制は、“真実” に対するコントロールを取り戻し、人々の“信頼” を回復することができる、ということだ。

もし、こうしたことすべてが転倒しているように見えるなら——もしあなたが、本当の答えはアメリカの指導者がもっと反動的に振舞い、民衆を真の“真実”に引き入れ、人々の“信頼”を意味あるものにするのではないかと考えるならば——あなたは“クレムリンの手先”に違いない。結局のところ、現行のグループ思考は、悪魔的ロシア人どもが、アメリカ人の民主主義への信念を覆そうという悪辣な陰謀によって、ウィキリークスに対し、あの民主党のEメールをこっそり教えたのだ、というものである。

しかし、もしあなたが、それでもまだフリードマンの理屈がわからないと言うなら、あなたは、アメリカの新しいメディアのパラダイムの働き方もまた、わかっておられないに違いない。メディアの仕事は、人々が自分で自由に判断できるように、できるだけ意味のある情報を与えないことなのである。つまりそれは、人々を好きな結論に導くような、ある程度の情報パッケージを作ることなのだ。

快適な神話

実は、フリードマンが絶対に望んでいないことは、アメリカの民衆が、彼ら自身の現実を理解することである——よいとか、悪いとか、醜悪だとか。そうでなく、我々が、我々のかなり小さい頭を、快適な神話でいっぱいにし、我々が毛刈り小屋か、それとも屠殺小屋へ追い込まれながら、特別の気分にならせることである。

例えば、フリードマンの友人サイドマンが、独立宣言や米憲法の高尚な宣布に、いかに我々が合意の「署名をした」かについて、我々に聞かせる歴史を、思い起こさせることである。実際は我々のほとんどは、どんな署名もしていない。我々はここに生まれてただけである。そして、ついでに言うと、「建国の父たち」は、全く信じてもないことを言ったり書いたりした偽善者だった。



(1787年の憲法集会の絵)

奴隷を所有するトマス・ジェファソンが、「我々はこれらの真理を自明と考える——すべての人間は平等に創られていること、彼らは創造者によって、ある譲ることのできない権利を与えられていること、その中には、生命、自由、そして幸福の追

求が含まれること」と書いたとき、彼は、その一言をも信じていなかった。彼は、自分の黒

人奴隷を劣った存在と考え、このような「譲ることのできない権利」に、全く値する者ではないと考えた。彼は成人してからの生涯の多くを、奴隷制度の擁護と拡大に捧げた。そしてそれは——彼の人間家畜への需要が増えていったために——彼の私的財産も増大させた。

<https://consortiumnews.com/2016/07/04/thomas-jefferson-americas-founding-sociopath-2/>

ガヴァヌーア・モリスが、“我々人民”を国家の真の主権者だとして、米国憲法の前文を書いたとき、彼は実は、カネや資産をもつ白人を意味していたのであって、より貧しい白人や、女性や、いわんや奴隷などは含まれていなかった。彼の“人民”という言い方は、もう一つのプロパガンダの見せかけであった。

ジャファーソンやモリスの言葉が、書かれた当時は、空虚なプロパガンダであったにもかかわらず、歴史がそれに純粋な価値を与えたという事実には、何らかのアイロニーがあるかもしれない。「すべての人間は平等に創られ、譲れない権利を保有する」というジェファーソンの主張は、世界中の人々を鼓舞し、そしてモリスのけばけばしいレトリックの文字通りの解釈は、ある意味で、“我々人民”を法的にアメリカの主権者にした——今日の支配者エリートは実はそんなものを信じていない。

フリードマンのような者たちの多くの言動は、我々をかつての情報の乏しかった依存状態に引き戻すことによって、エリート支配を再び主張するためのものである。我々は体制に依存して、彼らが適当と思うだけのわずかの情報、すなわち時の権力が与えてやる“真実”を押し頂くということだ。我々が彼らを“信頼”すればもっとよい。

しかし、ウィキリークスや、“サイバー・ハック”され、リークされた資料の他の発表者が、我々に利用できるようにしてくれた、むさ苦しい背後の現実——アメリカの偽善的で曖昧な歴史も含めて——もまた、アメリカの“真実”の一部であり、したがって、アメリカ人民すべての所有すべきものである。

それとは逆に、フリードマンや他の重要人物たちは、不快で、聞こえの悪い真実が、軽視されるか消去されうるような未来を作ろうとする。その方が、我々の指導者への“信頼”を保証できるからだ。

タイムズ紙やポスト紙は、特に一貫して、彼らの選んだグループ思考から逸脱したどんな情報も、“フェイク・ニュース”や“プロパガンダ”と同等に扱ってきた。これがあるために、彼らや他の自称・真理の調整者たち——親 NATO プロパガンダ・サイト **Bellingcat** を含めて——が、グーグルの“初稿連合”に坐って、彼らが“真実”と呼ぶものに逆らう情報を追

い詰めて消してしまう、ハイテクのアルゴリズムが活動する日を待ち望んでいる状況で、特に面倒なことになるのである。

真実についての真の真実は、それがほとんど常に複雑で、しばしば強力な利害によって隠されることである。それを顕わにするには、懐疑精神、勉強、それに勇気が必要である。

確かに、嫌な、あるいは狂った人間が故意に何かをでっちあげ、現実を無視して、愚かな陰謀論を広めようとすることがある。それは間違いなく非難に値する。しかし、ありきたりの知恵が間違っていて、不都合な事実を要求し、掘り下げた質問をする人々が、正しかったということもある。

<https://consortiumnews.com/2017/04/05/another-dangerous-rush-to-judgment-in-syria/>

だから、もしフリードマンや彼の仲間が、本当に信頼と真実を取り戻そうと思うなら、彼らはまず、彼らのグループ思考が間違っていたとわかった時のことを認めることによって、彼ら自身の欠陥を認めるべきであろう。彼らはまた、異論というものが困難な真実の探求においてもつ価値を、まず尊重すべきである。